

3. 環境保全業務報告

3.1 京都大学環境ファクトシート エコ〜ると京大2017活動報告

京都大学地球環境学堂 浅利 美鈴
京都大学環境科学センター 矢野 順也

学生・院生コアメンバー（安藤悠太、土村萌、定野愛美、横山恵利香
小川由、西堀功規、于再治、芳井崇悟、筒泉宏樹）

3.1.1 はじめに

全員参加型で環境負荷を低減した持続可能なキャンパスの実現を目指す様々な企画を実施した。新入生向けのワークショップのほか、環境月間である6月にあわせ、約1ヶ月間、吉田キャンパスを中心に様々な企画を展開した。また、通年でのプロジェクトも展開した。なお、「エコ〜ると京大」とは、エコ×世界（ワールド）からの造語であり、「Think globally, Act locally, Feel in the Campus!」のメッセージをこめると同時に、京大の中でエコを学ぶ学校（École とはフランス語で学校）を多様な形で開校する意味もこめたものである。

★写真は冒頭のカラーページでご紹介しています。

3.1.2 新入生向け企画「出汁ワークショップ」

新生活を始める新入生に、健康で環境にも配慮した食生活について考え、実践してもらうきっかけとなることを目指して、2017年4月6日に「伝統出だし汁でエコ・クッキング!」ワークショップを開催した。講師としては、京都の伝統的な暮らしを今につながる活動をしておられる京町家「秦家」主宰の秦めぐみさんにお越しいただいた。炒って、はらわたや頭を除いたじゃこ昆布を使って、作り置き可能な、美味しい出汁の作り方を学ぶと同時に、それを使った煮物とお汁を作り、約20人の参加者で試食した。また、「利き出だし汁クイズ」や会話でも盛り上がっ

た。

また、隣接する部屋にて、新入生&熊本・新潟被災地支援企画チャリティーフリーマーケットも行い、新入生や留学生が利用した。

3.1.3 初夏の陣（6月）

環境月間である6月は、一か月間に渡り様々な企画を実施し、できるだけ多くの構成員の参画を促すことを目的とした。

(1) オープンラボ

恒例のオープンラボ企画は、2017年6月6日から6月30日まで開催した。オープンラボの目的は、京都大学の先生と学生・市民が環境に関する話題を自由に交流できる機会を提供することであり、今年で第4回目を迎えた。今年は京都議定書採択から20年の節目の年であるため、共通テーマが「あの日あの時、そしてこれから〜研究分野の20年前、20年後〜」であり、参加した先生の20年前の写真を載せたポスターを掲載した。また、様々な分野から20名以上の先生、学生そして講師に参加・協力していただいた。会場は例年通り京都大学吉田キャンパス西部構内にあるルネの1階である。期間中毎日一人から三人の先生が待機して来場者を迎えた。今年は来場者数も大幅に増え400人越えを達成して405人であった。

企画は先生企画とイベント企画に分かれる。先生企画は大きく分けて「座談型」、「展示型」と「体験型」

の三つである。一つ目の座談型では、先生が来場者の質問に答えながら自由に交流した。「展示型」では、自身の研究と関係の深い品や自身が研究しているものを展示して下さった。チベット仏教のタペストリー、魚類、哺乳類の標本、南極の氷や簡易式トイレなど、様々なものが展示された。「体験型」では、自身の研究と関連のあるものを来場者に体験していただいた。惑星観察、コーヒー淹れや野菜の食べ比べなど普段なかなかできない活動がたくさんあった。

そして、今年のイベント企画は四つであった。一つ目はレジ袋削減のための企画であるマイバッグを作るワークショップで、日本環境保護国際交流会(J.E.E.)と布遊工房に協力していただいた。二つ目はフリーマーケットである。ネパールの震災被害地の支援が目的で、利益は全てネパールの被災地に寄付した。三つ目は「あなたのエコ度は？」である。本学大学院地球環境学堂・学舎の研究室(環境教育論)の院生が、「エコフットプリント」で生活のエコ度を自己チェックできるコーナーを運営した。四つ目は学内団体である **Vege** プロジェクトメンバーによる「**Vege** ワークショップ！」であり、ヴィーガン料理の試食なども行われた。

＜ラボ担当の先生(順不同・敬称略)＞

- ・浅利美鈴 地球環境学堂
- ・井植美奈子 セイラーズフォーザシー日本支局
- ・石川尚人 人間・環境学研究所
- ・磯部洋明 総合生存学館
- ・宇佐美誠 地球環境学堂
- ・尾形清一 経済学研究科
- ・酒井伸一 環境安全保健機構環境科学センター
- ・Jane Singer 地球環境学堂
- ・鈴木啓太 フィールド科学教育研究センター
- ・Marc-Henri Deroche 総合生存学館
- ・野中铁也 工学研究科
- ・原田英典 地球環境学堂
- ・藤井滋穂 地球環境学堂
- ・Benjamin McLellan エネルギー科学研究科
- ・本川雅治 総合博物館
- ・安田陽 経済学研究科
- ・山敷庸亮 総合生存学館
- ・矢野順也 環境安全保健機構環境科学センター

(2) チャリティーフリーマーケット

6月のうち5日間をチャリティーフリーマーケットの開催日としてルネ店舗前にて実施した。フリーマーケットではエコ〜ど京大で用意したリユース品のほか、家庭で不要となった品の無償回収および販売も行った。特に昼休みの時間帯の集客が多く、食器・雑貨・衣類などは低めの価格設定と実用性から人気が高く、1点からの購入も多かった。合計売上は4月からの合計で36,661円となり、全額を京都大学理学研究科の酒井治孝先生が支援しておられるネパール、ジュンベシ村の学校再建基金に寄付した。

(3) 浴衣着付け教室(京都着物企画との協働)

エコ〜ど京大と京都着物企画の協働で、浴衣着付け教室を企画・開催した。夏は、祭りや花火大会なども多く開催されており、浴衣を着る機会も多くあるはずだが、実際に自分の浴衣を着付けることができない人も多いのが現状である。着物、浴衣を持っているけど着付けられない、そんな人をできる限り減らしたいと思い企画を考えた。

6月21、22、28、29日の4日間で男子2日間、女子2日間を使って行った。参加者人数は、男子2人、女子19人であった。参加者からは、良い経験になったとの感想が多く得られた。

(4) 連携した各種勉強会等

他にも、初夏の陣にあわせて、次のように、他団体との連携企画が行われた。

◆6/2 環境省特別講演会(環境省との連携)

「環境行政の本質と展望 〜水俣病、地球温暖化などの事例を通じて〜」講演者：環境省 地球環境局 地球温暖化対策課 課長補佐 飯野 暁

◆6/3 映画上映会(Conserv'Sessionとの連携)

『The Cove』『Behind The Cove』の上映とトーク

◆6/6 キャンパスエコツアー

キャンパスの知られざるエコなしかけを徹底解説！

◆6/9 海洋資源に関する特別講義

<http://eco.kyoto-u.ac.jp/?p=4115>

「海洋資源・環境の保全とブルーシーフード」講演者：セイラーズフォーザシー日本支局理事長 井植美奈子

◆6/12 FAO×京大×京都市「食と環境」シンポ（実行委員会との連携）

講演者：京都市 門川大作市長、FAO Marcela Villarreal 局長、京都大学 縄田栄治農学研究科長ほか多数

◆6/19 海ごみに関する特別講義

「海洋へのプラスチックごみの流入：この地球規模での課題を解決することができるか？」講演者：ジェナ・ジャンベック准教授（ジョージア大学）

◆6/20 持活プロジェクトプレミィティング&説明会（持活プロジェクト全体については後述）

<http://eco.kyoto-u.ac.jp/?cat=66>

◆7/4 エディブルガーデン竣工式（詳細は後述）

3.1.4 竹の活用&ガーデン企画

キャンパス内で、植物を育てることで、自然と触れ合う機会を増やし、自然との向き合い方の多様性を広げようと、ガーデン化企画を始動させた。ガーデンの骨組みには、桂キャンパス内の竹を利用した。

(1) 竹の環（わ）プロジェクト

2017年4月23日（日）、筍狩り&間伐の実習企画「Neo 竹の環（たけのわ）プロジェクト」を開催した。京都大学大学院地球環境学堂の3研究室（浅利研・柴田研・小林研）が中心となり、工学研究科や地元団体「京都土の塾」の協力を得て、学生や教職員、地元の方々など総勢40人が参加した。

この日は天候に恵まれ、暖かい日差しと爽やかな風の中で活動することができた。また、筍は例年採れる時と採れない時とで差が激しく、今年はどうなのかと懸念していたが、大豊作であった。

筍掘りで大満足…の後は大労働。竹林保全のためには、適度な間伐が重要であるが（筍を掘るのもその一環）、今回は間伐した竹材を使って、エコ〜るど京大が推進するガーデン企画の造作に使用することを目的とした。ガーデンをより魅力的かつサステイナ

ブルなものとするため、キャンパス内の循環素材である竹を使って構造を作ることとした。指導者の「京都土の塾」の方々の巧みな手捌きと皆さんの頑張りのお陰で、貴重な材料を揃えることができた。相当大変な作業であったが、竹に鋸を差し込み、力を合わせて竹を倒し、必要な長さに切り揃え、竹が燦然と緑に輝くまで枯葉で磨き、鑿や槌で竹に窓を開け…と普段ではなかなかできないような作業、労働に打ち込み、気持ちの良い汗をかくことができた。

その後、数日かけて、ガーデンの骨組みを完成することができた。

(2) ガーデン化&竣工式

6月、前述の竹を用いたガーデン拠点が総合研究5号館前に完成した。これは、小林研の設計によるもので、メンバーや協力者により制作したオリジナルな構造物である。

それを記念し、7月4日に、エコ〜るど京大初夏の陣最後のイベントとして、「エディブルガーデン竣工式／竹と食の祭典」を開催した。

このガーデンの設置を祝ったもので、インドネシアとミャンマーの学生の方々によるパフォーマンス、新鮮野菜とヴィーガン料理の立食会、そして輪投げゲーム（竹を使ったゲームの予定だったが、雨天のため変更）というプログラムの下、進行了た。最初のパフォーマンスは、みなさんの国の伝統的な衣装を身に纏って印象的な歌とダンスを披露して下さった。日本にいてはあまり見ることはできない貴重なものであった。また、いずれのパフォーマンスにも、自国の文化に対する誇りや自然と共生する姿勢が感じられた。続く立食パーティーでは、ヴィーガン料理とガーデンで採れたハーブによるハーブティー、そして地元の新鮮な生野菜を提供した。動物性食品は植物性食品に比べて生産コストが大きく、環境負荷も高いので、今回は、動物性食品が無くても美味しい食事が楽しめるということを知っていただきたと思い、あえてヴィーガン料理にした。また、栽培が簡単なハーブの良さも知っていただけたと思う。最後の輪投げゲームは、エコ〜るど京大につながるのある先生方が提供して下さった様々な景品を巡ったものであったが、予想以上に盛り上がった。

3.1.5 着物復活企画「Kistory」

エコ〜るど京大と京都着物企画にて、タンスに眠っている着物の寄贈を 2017 年 6 月より呼び掛けたところ、学内外の多くの方から、100 点以上をご寄贈頂いた。それを使って、今後、寄贈頂いた着物を各自活かしていけるよう学生約 50 名が着付けを習った。

12 月 23 日には、頂いた着物を着て勢ぞろいし、寄贈者の皆様にご披露するというイベントを京都大学時計台にて行った。冒頭、京都市長門川大作さんが駆けつけてくださり、着物の極意について、ご自身の着物も披露しながら、お話をくださった。寄贈者には、各学生からお礼のお手紙をお渡したが、代表して読み上げと贈呈を行い、また、交流の時間を持った。後半では、着物の理解と普及について語り合うワークショップを行い、多くのアイデアに、参加者同士が刺激を与え合う時間になった。今後、新しい Kistory が始まることを確信する素晴らしい時間となった。この様子は 1 月 20 日発行の日経新聞 社会面にも掲載され、大きな反響を得た。

3.1.6 SDGs を通して学び行動する「持活（じかつ）」プロジェクト

2017 年は、1997 年に採択された「京都議定書」から 20 年、京都大学創立から 120 年である。そこで、京大の大学生・院生を中心に、環境問題に取り組む教職員や、実際に事業を行っている企業・団体と連携しながら、20 年（短期）スパンと 120 年（中長期）スパンなどの視点から、社会やキャンパスの持続可能性を考える企画を展開した。

(1) キックオフ企画

2017 年 6 月 20 日に、プロジェクトを始めるミーティングを行った。約 20 名の先生方と約 20 名の学生・院生に加え、約 10 人の社会人が参加した。先生方からは、環境・持続可能性に関して、「解決が難しいと思われる課題」について、それぞれの考えが紹介された。学生は、それも念頭に置きながら、今後、国連の提唱する持続可能な開発目標（SDGs）を素材に、学習と議論、実践を行っていくこととなった。

(2) グループ別活動

6 月以降も話し合いを重ねたが、8 月 8 日には、学生メンバーが朝から夕方まで、具体的な活動の中身について、議論・確認を行った。その結果、夏休みの期間は、大きく次の 2 つのグループに分かれて活動することとした。なお、終盤には、協力企業（㈱エフピコ及び自然電力㈱）の現場において、SDGs の実践と課題を学ぶ研修旅行を実施した。

◆持活生活（じかつせいいかつ）チーム

SDGs の 17 の目標（何かしら 1 つの小目標や関連する事項でも良い）を、それぞれの生活でクリアしていくことを目指して、明日から各自取組をスタートした。といっても、特別な生活に切り替える訳ではなく、日常生活を送りながら、その中で、できることにアプローチし、それを、文章や写真・動画等で記録していくという方針である。

◆持続可能性を掘り下げるチーム

もう一つのチームは、持続可能性や SDGs を掘り下げていくこととなった。できるだけ分野横断的に、幅広くとらえるのが環境・持続可能性課題や SDGs に求められている。しかし、なかなか議論にならない。まずは、各自が関心のある数分野について、掘り下げてみて、共通の論点や、他の問題との関係性について、考えてみることとなった。

(3) 京大生への SDGs 提案

実践や学習を進めた上で、今年度の到達点として、自分たちに求められる具体的かつ魅力的なアクションを取りまとめて発信することとなった。メンバー 1 名が 1〜3 目標を担当し、お勧めのアクションやお勧めの学習方法などを検討した。何度も案を出しては、メンバーで議論を繰り返し、ブラッシュアップした上で、新入生向けの配布物としてまとめた。

結論や正解がある取り組みではないが、自分とは異なる他者の意見を受け入れながら、問題の本質にいたる会話を繰り返すことで、多くのメンバーが SDGs を促進する人材に、一歩近づいたのではないかと思う。